

論文要旨

2022年度

担当教員	朴 順禮	学籍番号		氏名	齋藤 桃子
(論文題名)					
がん患者のゆるしのプロセス及び、精神的健康との関連：スコーピングレビュー					
<p>【背景】 ある出来事に対して生じた否定的な反応を中性的・肯定的なものに変容させようとする概念として、ゆるしが存在する。1980年代中頃から心理学分野において、ゆるしに関する研究が国内外で行われており、ゆるしは健常者のうつ傾向や怒り、ストレスを減少させ、精神的健康を高めることが示されている。他方、がんへの罹患は生命の危機を想起させ、全人的苦痛を伴う。患者はがんへの罹患や人生における葛藤に関して、自己、他者に対する否定的感情を抱く場合がある。このことは精神的苦痛やスピリチュアルペインを強め、日常生活に悪影響を与えることも少なくない。健常者におけるゆるしの効果を考慮すると、がん患者が自己や他者をゆるすことは、精神的苦痛やスピリチュアルペインを軽減し、その人らしい生活を送ることに繋がると推測される。海外では、ゆるしは医療分野でも注目されており、ゆるしの効果や介入について検討されている。それに対しわが国では、がん患者をはじめとして医療分野におけるゆるしの研究は行われていない現状がある。</p> <p>【目的】 がん患者のゆるしのプロセス及び、精神的健康との関連を明らかにし、看護実践への示唆を得る。</p> <p>【方法】 PRISMA-ScRの方法に従い、スコーピングレビューを実施した。医中誌Web、PubMed、CINAHLを用いて、2022年8月までに公表された文献の検索を実施した。医中誌Webでは「がん」に「ゆるし」を掛け合わせ、PubMed及びCINAHLでは“cancer”に“forgiveness”を掛け合わせて検索した後、選定基準に基づいて文献の評価を行った。</p> <p>【結果】 109件の文献を評価した結果、9件の文献が採用された。アメリカの文献が7件、スイスの文献が1件、カナダの文献が1件であった。ゆるしのプロセスを明らかにした文献が4件、ゆるしと精神的健康の関連を明らかにした文献が5件であった。他者をゆるすプロセスは共通する8つの要素「傷ついた出来事を経験し、相手への否定的感情を抱く」「がんと診断され、死に向き合い、人生について考える」「個人の価値観を再確認する」「危機に陥る」「状況、加害者、自分自身について理解を深める」「ゆるすことを決断する」「ゆるす」「自分が望む人生を生きる」から構成されていた。自己へのゆるしは心理的苦痛及び気分障害を軽減させ、QOLを上昇させることが示されており、その中で希望や自己非難は間接的媒介効果を示していた。</p> <p>【考察】 ゆるしの定義は研究者間で明確なコンセンサスが取られておらず、本研究においても、採用した文献間で違いが認められた。しかし、罪悪感や非難などの否定的感情を変容させるものとしてゆるしを捉えている点は共通していた。がん患者が他者をゆるすプロセスには、健常者のプロセスとの相違点として、2つの特徴が認められた：①がんの診断をきっかけに死に向き合い、人生について考えることがプロセスを促進する。②がん患者にとって、他者をゆるすことは目標ではなく手段である。自己へのゆるしについては、がんへの適応を促進することが示唆された。がん患者の自己へのゆるしと他者へのゆるしの共通点として、状況や人物に対する認知の変容を必要とすること、ゆるしは自分が置かれている状態をポジティブな視点で捉えられるようになるという変化をもたらすことが明らかになった。看護師は、患者の療養生活に最も密接に関わる職種であり、患者が他者や自己に対する否定的感情を表出したり、ゆるしを求める場面に遭遇することが多い。がん患者の心の安寧や、その人らしい人生を支えるために、看護師は、がんの診断や人生の中で傷ついた出来事に対する患者の反応を患者の目線に立って確認し、危機に陥っている患者を早期に発見して、ゆるしのプロセスを側で見守りながら、必要な支援を提供することが重要である。しかし、看護師のゆるしに関するコミュニケーション能力や、がん患者を対象とした効果的な介入に関する研究が不足していることが課題として挙げられる。今後はがん患者のゆるしのプロセスについて研究を進めるとともに、看護師を対象とした、人生の振り返りや認知の変容を促すコミュニケーションに関する教育及び、ゆるしに焦点を当てながら、患者がその人らしい人生を生きることを支える介入の開発・教育を行っていく必要がある。ゆるしの捉え方は文化的背景により異なるが、個人の内面で起こる変化としてのゆるしを促進することは、日本人にとっても重要であると考えられる。そのため今後は日本の医療分野においても、ゆるしに関する研究を進めていく必要があると考える。</p>					

担当教員	福田 紀子 先生	学籍番号		氏名	藤本 祥子
(論文題名)					
<p style="text-align: center;">精神疾患を抱え子育てをする母親にとっての ピアサポートグループの場の意味と支援者による支援</p>					
<p>【研究背景】 近年、精神疾患合併妊産婦は増加している。精神疾患を抱える母親は生活で様々な課題を抱えているため、チームアプローチによる早期介入と継続的な支援が重要である。また、地域における支援として、ピアサポートグループがある。ピアサポートグループでは、当事者同士で悩みや不安を共有し支え合うことができるため、精神疾患を持つ母親が育児をする上で医療者の支援では得られない重要な要素になっていると考えた。</p> <p>【研究目的】 子育て支援のグループミーティングへのフィールドワークを通して、 1.精神疾患を抱え子育てをしている母親にとって、ピアサポートグループがどのような場になっているかその意味を明らかにする。 2.ピアサポートグループにおいて看護師等の支援者がどのような支援を行なっているか明らかにする。</p> <p>【研究方法】 訪問看護事業等を行う A 事業所が開催する子育て支援事業のグループミーティングに参加している、子育て中の精神疾患を持つ母親と支援者（看護師、精神保健福祉士）を対象とした。事業内容は、母親を対象としたグループミーティングと、児童を対象としたケア的保育である。グループミーティングは毎月 1 回の頻度で開催されており、2022 年 10 月から 12 月に合計 3 回のグループミーティングに参加した。 観察した内容からフィールドノーツを作成し、質的な分析を行った。グループワークとインタビューでの母親の語りから、母親にとってピアサポートグループがどのような場になっているかを分析し、その意味を表す名前をつけてカテゴリー名とした。また、グループワークでの支援者の言動とインタビューでの語りから、支援者による支援を抽出しカテゴリー名をつけた。</p> <p>【結果】 合計 3 回のグループミーティングで、のべ 16 名の母親とのべ 9 名の支援者の相互作用を観察した。 1.母親からみたピアサポートグループの場の意味として、【悩みを相談して問題解決の行動につなげる場】 【精神疾患を持つ母親との交流のなかで不安を軽減し、安心感を得る場】【母親のコミュニティとして交流を広げ、維持する場】【子どもの遊びの場】の 4 のカテゴリーが抽出された。 2.ピアサポートグループにおける看護師等の支援者による支援として、【円滑で効率的なグループミーティングの運営】【母親の心理的安全性の確保】【母親の相互作用の活性化】【母親が抱える悩みの問題解決につなげるアセスメントの実施】の 4 のカテゴリーが抽出された。</p> <p>【考察】 参加者の特徴として、生活において難しい課題を抱えている母親が多いことが挙げられる。母親が抱える悩みは、自身の精神疾患の症状だけでなく、子どもや夫、両親などの家族関係によって生じているものが多く、複雑な課題が多かった。ピアサポートグループが持つ意味について、ヤールムが集団の治療因子について挙げているが、今回のグループミーティングもそのような意味を持つ場であるとわかった。同時に、支援者による支援がそれらを増強する因子になっていると考えた。グループミーティングには支援者を含め様々な年代の女性が参加しているため、母親自身や子どもの各々の過去・現在・未来のライフステージ特有の話に対応することができる。また、他の母親をロールモデルとして様々な場面の話を聞くことで、将来的に活かすことができる知識を増やすことができる。 支援者が母親と丁寧な関わりを積み重ねることで、支援者-母親間の壁が低くなり、信頼関係が築かれていた。そして、本事業の支援の特徴として、看護師等の支援者による継続的な家族支援ができる体制が整っていることが挙げられる。本事業で得られる情報と訪問看護で得られる情報を掛け合わせることで、支援者が家族の全体像について共通認識を持ち、その上で家族支援をすることができると考えた。</p>					

論文要旨

2022年度

担当教員	堀口崇先生	学籍番号		氏名	古家あいか
(論文題名)					
気管・気管支の立体構造を「見える化」するための3D解剖モデルの自主製作ならびに呼吸器ケア実践における有用性の検討					
(内容の要旨)					
〈背景〉					
3年次の病院実習で、患者の状態を把握して適切なケアを考える中で、肉眼解剖に代表される構造だけではなく、各臓器の機能も併せて理解しておく重要性を痛感した。自らが理解した解剖学的立体構造に基づいた3D解剖モデルを自主製作することで、その学習過程で解剖と機能の統合的知識を修得するとともに、この学習成果が看護ケアの立案や実践においてどの程度有用であるか検討したいと考えた。					
〈方法〉					
2Dで正確な立体構造を意識した解剖図が描かれた成書や、タブレット端末で操作して3D解剖を理解する学習教材、健常人の胸部CT軸位像などを活用して、気管・気管支の分岐方向や分岐角度、立体的な位置関係を学ぶとともに、亜区域気管支にいたるまでの立体構造を自らの頭の中でイメージできるようにした。修得した解剖学的知識をもとに、気管・気管支の3D解剖モデルを自主製作した。					
製作したモデル内に模擬喀痰を注入し、以下の実験を行った。 【観察実験1】 各亜区域気管支について、先行研究で推奨されている体位（以下、推奨体位と記載）における排痰の有効性を推測した上で、その推測が正しいかを検証した。推奨体位での排痰効果が無効となった亜区域気管支については、必要な体位修正を検証した。 【観察実験2】 各推奨体位が排痰の対象としている肺区域以外で、重力の影響により排痰効果が及ぶ可能性がある肺区域を推測し、その推測が正しいかを検証した。					
〈結果〉					
【観察実験1】 45本の亜区域気管支のうち、10本(22.2%)で推奨体位での排痰効果が無効となり、有効な排痰を行うためには何らかの体位の修正が必要だった。 【観察実験2】 のべ23肺区域において排痰効果が及ぶと推測され、のべ17肺区域(73.9%)に排痰効果が及ぶことが示された。					
〈考察〉					
【観察実験1】 から、教科書などで推奨されている体位をとるだけでは排痰が難しい気管支があるということが明らかになった。また、 【観察実験2】 から、各推奨体位が排痰の対象としている肺区域以外にも、重力の影響により排痰効果が及ぶ可能性がある肺区域が複数あることが明らかになった。これらのことから、亜区域気管支の空間的な拡がりを考えながらケアを行うことで、より少ない回数で体位変換で排痰の有効性を高めることが可能になると考えられる。					
3D解剖モデルの製作を通して、自身の頭の中で気管・気管支の立体構造をイメージすることができるようになり、より効果的な看護ケアを行うことにつながると考えられた。また、本研究で実践された学習方法は、学生の学習過程やレディネス、学習ニーズに合わせる事が可能であり、効果の高い教育方法の1つになり得ると考えられた。					